

セキュリティ管理優位の組織

1. 柏崎刈羽原発のセキュリティ管理違反

去る3月17日、原子力規制委員会は東京電力柏崎刈羽原発7号機に再稼働に必要な核燃料搬入を認めないと決定した。その理由は、入構管理が杜撰であったというものである。次の3つの欠陥が順次明らかになったからである。

- 20年9月に、社員が同僚の認証カードを使って中央制御室に入室していた¹。
- 15年8月に、協力企業の社員が、同じ会社で働いていた父親のIDカードを使用してゲートを通過した²。
- 昨年3月以降、計15カ所で侵入を検知する装置が故障。10カ所で30日以上検知できない状態が続いた。社員警備員は代替措置に実効性がないと認識していたが、改善されなかった³。

原発の入構管理は図1のようなゲートを設けて、本人確認と物品検査を行っている。これは日本の原発ではどこでも標準的に行っているようで、私は福島第一と女川で経験した。ドイツの原発を見学した時も同じ要領であった。物品検査というのは、第1には核物質を持ち出さないかという核物質防護上のチェックと、第2には武器などの持ち込み防止である。核施設への意図的な破壊を行ったり、原発運転者への脅迫・攻撃によって過酷事故を誘発させたり、過酷事故対策を妨害したりする行為の防止である。



図1. 原発の入構管理ゲート

¹ 「不正入室委員長にも伝えず」『朝日新聞』2021年2月9日

² 「東電の柏崎刈羽原発 6年前にも不正通過」『朝日新聞』2021年5月11日

³ 「柏崎刈羽 再手続き保留」『朝日新聞』2021年3月18日

しかし、秘密工作や暴力的破壊攻撃には様々なレベルがあり、現在のアフガニスタンやシリアなどで、一人の兵士が肩に担いで飛ばすことのできるロケット砲があるし、大小さまざまなドローンもあり、さらに日本の海岸に面している原発群を潜水艦や偽装した船で至近距離から攻撃することも困難ではない。私の友人の小倉志郎さんは、早くから「原発を並べて自衛戦争はできない」と述べている⁴。



図2. すべてが海沿いにある日本の原発

アメリカでは各原発のフェンス沿いに一定間隔で銃を構えた警備員が配置されているという。ドイツで見た廃炉作業中の原発では少なくともゲート管理を行っている付近に、短銃をガンベルトに装着した警備員が2名は見えた。日本では、武装警備員はおらず、武力攻撃を受けたときにはその地域の警察署と、海上保安庁に連絡して対抗してもらうという。しかし、敷地外から駆け付ける武装警察官や海上保安官が即応戦力になるとは思えない。

つまり、今回の原子力規制委員会の核燃料搬入禁止措置は、強固で有効な防護機能を実質上著しく損なったから再稼働を禁止したというのではない。規制委員会が処罰対象とした入構管理上の規則違反は、「竹やり訓練やバケツリレー訓練」程度の有効性しかない。規制委員会の処分は、日ごろ戦意向上を叫んでいる町内会長が、「あの家はたるんでる。見せしめに懲らしめてやろう」「食糧配給を差止め!」と、「精神注入棒」を振りまわした結果に過ぎない。

原発反対論者の私としては、理由の如何を問わず原発の運転が止められることは望ましいとは思っている。しかし、この度の処置が本質的な原発の危険や、本質的な反社会的性格をかえって覆い隠す結果になるのではないかと危惧している。

2. 原子力規制委員会の判断基準

原子力規制委員会が、原発の設計・建設・運転・放射能汚染といった専門知識に基づいた深い洞察による社会的受容の正統性を検証するのではなくて、通門ゲートのルールを順守したかどうかを、原発事業者の適格性判定基準の最上位に位置づけていることは、あたかも、中学校教師が、生徒の人格識見に注目するのではなくて、

⁴ 小倉志郎『元原発技術者が伝えたいほんとうの怖さ』彩流社、2014年 に収録されている。

スカート丈や髪の毛の色に対して目くじらを立てているのと同質の行為である。

原発には、大掛かりな装置と多数の人間集団を緊密に協調させるための高度に専門的な判断を要する問題が山積している。その本丸に迫ることなく、入出門管理手続きを最大級の処分の判断基準にしていることは、かれらの資質が国民の負託に耐えられるかどうかを疑わせる事態である。

3. 一般プラントの入出門管理

私は長年プラント建設の仕事に携わってきたので、建設現場に入るときはそれぞれの顧客のプラント敷地の入口の守衛所で入出門の手続きをしてきた。最近は次第に電子化されたカードで管理されるようになってきたが、以前はほとんど守衛さんに入門証を示してゲートを通過していた。入門証は初めてそのサイトに入る日に、その現場の安全管理者が行う「安全管理教育」をまず受けた後、通門証を発行してもらう。会社によっては写真付きもあるが、写真がなくて氏名と有効期限が記入されただけの簡単なものも少なくなかった。

通門証の主たる目的は、そのプラントを所有している会社が、自社の敷地内だけで人を出さないためという安全管理責任を果たすことが第一の目的であった。たとえば、朝入構した作業員が、装置内で補修工事をしているときに窒息したり怪我をしたまま閉じこめられて出てこないようなことが、もっとも警戒すべき事態である。第一義的には工事の元請会社の安全管理責任者が監督しているが、その工事の発注者であるプラント所有会社も責任を負う(死亡事故が発生するとプラントの操業停止を労働基準監督署から申し渡されることもある)。破壊工作や武力攻撃を警戒して入出門管理していることは、民生用一般プラントでは、私には経験がない。海外のプラント建設で、その地の人々にとって珍しい工具や防護具が盗難に遭ったという、コソ泥程度の被害は聞いたことがあるが、暴力や悪意の破壊を警戒したことはなかった。いわば、一般社会生活の中で盗難や交通事故に遭わない程度の用心をしていれば済む話であった。

こういう雰囲気顧客構内の建設現場事務所に 1~2 年通っていると、守衛さんとも顔なじみになり、通門証が期限切れになっているのを更新忘れしていた際に、「今日中に更新するから勘弁」と言って、朝の入構を許してもらうというくらいのことは日常茶飯事であった。

4. 顔パスこそ人間社会の証し

柏崎刈羽原発が厳しい処分を受けている主たる理由は「顔パス」を許したということである。しかし目的は、そこへ入る人びとの中に、好ましからざる悪人が紛れ込むことを防止することである。たとえば、福島第一に毎日 5 千人の人びとが入り出すとしよう。ゲートは 1 日 1 万人を判別する。年間 300 万回の判別を行う。とんでもない悪人が入るのはせいぜい 10 年に一度くらいであろう。とすると 3 千万人に一人の悪漢を判別することがゲートの役割である。そのために、残り的人びとに総計 3 千万回にわたって人間感情を分断した気分を味わわせる必要が生じる。

原発の中での仕事の能率が悪いことや、仕事の質が悪いことがいろいろに指摘されている。たとえば、凍土壁が最後まで所期の性能を発揮していないこと、トリチウム汚染水タンクの中に他の放射性核種が多く混じっているタンクが 72% もあることなどである。これらの多くは放射線被ばく作業のために、仕事の出来上がり品質を確かめる前に仕事を手放さなければならない作業環境が原因だと理解されている。

それにもまして、有効な作業チーム結成のために必要な人間同士の結びつきを妨げる致命的な要因が、このような人間分断環境にあるのではないかと思う。

現場作業を行うということは、必然的にチームワークをとらなければならないことであり、5 人ないし 10 人のチームが年単位で

緊密に呼吸を合わせて働くことが、仕事の品質においても相互の作業上の安全確保においてもきわめて重要である。年間放射線被ばく量の上限が来たら入構できなくなってチーム維持が困難になることに加えて、一人ひとりを文字通り機械的に厳格に管理していくというシステムが、基本的な社会的人間関係を阻害しているのではないか。

政治指導者が、暗殺のリスクを冒して公衆の面前に全身を露出して暗殺されたことは歴史上数々の例がある。カエサルは様々な不吉な予兆があったが無防備で元老院へ行った⁵。リンカーンもケネディ兄弟も多くの人びとの前で殺された。かれらは、公衆の面前に全身と全人格を表すことが使命を果たすに不可欠だと認識し、リスクを甘受したのであろう。

5. 人びとの分断

強権政治の国で、反体制活動を行う人びとはつねに身の危険にさらされているので、厳しい護身手段をとらざるを得ない。一昔前(一部の国では今も)、南米の国々ではアメリカ合衆国の大資本がプランテーションを経営して、地元の人びとを奴隷のように扱っており、政府も大資本の手先になって、人権を主張する活動家を弾圧していた。コロンビアの作家で1982年のノーベル文学賞を得た G・ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』にはそのような社会で人民軍のリーダーとして戦った人が登場する。アウレリャーノ・ブエンディアーア大佐と言ひ、大勢の部下を率いて自宅に帰った時の描写が印象的である⁶。ボディー・ガードがつねに銃を構えていて、親兄弟に対しても「身の回り3m以内に近づいたら撃つぞ」と脅かす。つまり、この小説が描く社会は、大地主と半ば奴隷労働を甘受する農業労働者の群れの組み合わせを社会基盤としている。そして人々は何世代にもわたって、相互に孤独な人生を重ねていく。人間を機械的管理の下に置くゲート管理は、人間を物理的な労働力とカウントするこの種の職場にしかそぐわないのではないか。

機械的ゲート管理を行う職場に、様々な職種の技能労働者や技術者からなる、同格で自発的な結合が形成できるはずはなく、そのプラントが複雑かつ高度であればあるほど、例外を許さないフラットな機械的管理は労働意欲注ぐことになる。そういう管理が求められる職場を推進する産業と政府機関を、私たちは速やかに追放しなければならない。

⁵ スエトニウス、国原吉之助訳『ローマ皇帝伝』岩波文庫、1986年、上 pp.84-86

⁶ G・ガルシア＝マルケス、鼓直訳『百年の孤独』新潮社、1972年